

桜の名画

— 奥村土牛筆《醍醐》 —

春——日一日と暖かくなってきた。あの厳しい寒波が嘘のようだ。「春はあけぼのが一番だ」と清少納言はたたえなければ、現代の私たちにとっては「春は桜が一番だ」というのが率直な気持ちだろう。春になったから桜が咲くのではない。桜が咲くから春になるのである(?!)

この筆舌に尽くしがたく美しい花が「サクラ」と呼ばれるようになった理由は、いろいろな説があつて定説を見ないらしい。日本神話に登場する木花之佐久夜毘売があまりに美しく、この世で最高に美しい花と肩を並べるほどであつたので、その花を「サクラヤ」と称したが、それがなまってサクラになったという伝承こそ正しいものと私は信じている。やがて「花」といえばすなわち桜を意味するよう

の望月のころ」と詠んだ西行のような桜狂が誕生するのは不思議でも何でもない。その後桜が日本や日本人のシンボルとなったことは、「しきしまの大和心を人とはば朝日に匂ふ山桜ばな」という江戸時代の国学者・本居宣長の一首から容易に推定することができる。

桜といえど和歌かもしれないが、漢詩人だつて負けてはいない。江戸幕末の藤井竹外が得意とした七言絶句の「芳野」はよく知られるところ、マイ戯訳で紹介することにしよう。

古き陵——松柏つむじ風受け吼えている
春の爛漫 山寺に 尋ねりや花は散つたあと
雪の眉毛の老僧が 箒持つ手を休めつつ
積もる落花に囲まれて 昔語りは吉野朝



奥村土牛《醍醐》 山種美術館

東京大学名誉教授(日本美術史)

河野元昭
こうの もとあき



になり、たくさん異名をもって呼ばれるようになったが、その中に「つまごい草」がある。『広辞苑』で「つまごい」を引くと、「妻恋」のほかに「夫恋」も挙げている。男女がお互いに惹かれ始める季節——春を象徴する桜に、何とふさわしい異名だろう。よく知られるように、『万葉集』には梅を賛美した歌が119首もあるのに対し、桜は45首とその半分以下である。これは唐の都長安から運ばれてきた異国文化に、大宮人が心酔しきつていたためと考えられている。だが寛平6(894)年、遣唐使が停止されてその影響が弱まり、優雅な貴族文化、いわゆる国風文化が栄えてくると、桜への愛好が梅を凌駕するようになる。

「ねがはくは花のしたにて春死なむそのきさらぎ今春、山種美術館では、桜の名画を集めた特別展「桜さくら SAKURA 2025—美術館でお花見!」が開かれている。その中から選ぶ「僕的一点」は、何といても奥村土牛の彩管になる『醍醐』である。東京に生まれた土牛は、はじめ梶田半古に学び、やがて同門の先輩小林古径に師事した。自然への深い共感を卓越せる画技によって生き生きと表現、岡倉天心が創始した日本美術院の中心的画家として活躍、73歳にして文化勲章を受章したが、平成2(1990)年、101歳で逝去するまで創造の筆を折らなかつた。

土牛の《鳴門》と並ぶ代表作が、この《醍醐》にほかならない。慶長3(1598)年春、太閤豊臣秀吉はかの有名な花見を醍醐寺で盛大に挙行したが、その三宝院に「太閤しだれ桜」があつて、春になれば見事な花を開かせる。この銘木に魅了された土牛は、昭和47(1972)年、再興57回院展出品作のモチーフに決めたのであつた。

土牛は微妙な色感を求めて、刷毛で胡粉などを100回以上も塗り重ねたといわれるが、『醍醐』も例外ではなかつたであろう。太閤しだれ桜の華麗にして静謐、堂々として艶やかな美を土牛独自の画境に高めた《醍醐》は、見るものを感動させてやむことがない。しかしこれには続きがある。4年前、太閤しだれ桜を培養した桜が、山種美術館の玄関横に植えられ、毎年醍醐寺の原木とまったく同じ美しき花が開くのである。土牛畢生の名作とともに、この桜をぜひ観賞してほしい。

時の調べ Essay

略歴

東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了。現在、出光美術館理事、東京大学名誉教授。専門分野は日本近世絵画史。著書に『琳派響きあう美』(思文閣出版、2015年)、『文人画往還する美—思文閣出版、2018年)、『江戸絵画 京と江戸の美』(思文閣出版、2022年)など。

「饒舌館長ブログ」を毎日発信



展示情報

【特別展】
「桜 さくら SAKURA 2025—美術館でお花見!—」
会場：山種美術館(東京都渋谷区広尾3-12-36)
会期：2025年3月8日(土)～5月11日(日)
休館日：月曜日【5月5日(月・祝)は開館】